

チェルノブイリ通信

2011年12月10日

No.86

- 発行 NPO法人チェルノブイリ医療支援ネットワーク
〒811-3102 福岡県古賀市駅東2-6-26パステル館203号
TEL/FAX 092-944-3841 Email jimur@cher9.to
ホームページ <http://www.cher9.to/>
- 募金口座 郵便振替口座 01770-1-65328
楽天銀行 ジャズ支店(支店番号201)(普)7017104



チェルノブイリ医療支援ネットワークは、チェルノブイリ原発事故で被災した人々のために、
現地から求められる医療支援を行います。
この活動を通して、日本とベラルーシの人々の心と心のつながりを深めます。



復路のモスクワにて、公園を散歩する小さな女の子
ひと足早い冬の訪れを感じさせる

特集:ブレスト第11回検診帰国報告(1)

福島にチェルノブイリの経験を生かしたい

医師をめざす学生の視点から

ブレスト第11回検診団に同行して

福祉工房「のぞみ21」訪問

ベラルーシ紹介 歴史編(3)

今さら聞けないチェルノブイリQ&A

事務局日誌より主な活動報告

2012年度通常総会のご案内

インターン体験レポート

募金者のお名前とメッセージ

● 特集 ● プレスト第11回検診帰国報告 (1)

福島にチエルノブイリの経験を生かしたい



上) 移動検診車「雪だるま2号」でベラルーシの大地を走る 次頁右上) ベラルーシ赤十字にてカルヴァノフ総裁とともに 右下) 新聞社の皆さんと通訳のバレリーさん 左上) 在ベラルーシ日本大使館にて 左下) プレスト内分泌診療所にてアリョーシャさんと

今年も9月25日から10月2日(調査団は4日)まで、ベラルーシに行ってきました。今年
は、朝日新聞、中国新聞、産経新聞の記者の同行もあり、総勢14名での訪問となりました。
今回は3月11日に起きた福島第一原発事故を受け、参加者の皆さんには、少しでも参考に
なることを知り、日本で生かしたいという思いが表れているのを感じました。
事前に、ベラルーシでは最近物価が上昇して為替レートもかなり変動していることを知
り、現地での食事や物の調達が難しいのではないかと心配していましたが、私たちの関係す
る部分では大きな問題はなく過ごすことができました。
(報告/福岡由紀子)

9月26日、最初の訪問地である
在ベラルーシ日本大使館では、清
水先生の「今の福島にチエルノブイ
リの体験を生かせないか…」の言
葉に、松崎大使は、堰を切ったよ
うに語り始めました。数か月前
に日本の農水省から土壌の専門
家、畜産の専門家がやってきてベラ
ルーシの研究者と会い、たくさん
の資料を持ち帰ったそうですが、
文科省や厚労省からは来ていない
こと、長年チエルノブイリの研究を
している広島・長崎の研究者の知
見を、早く有効に生かしてほしい
こと、汚染濃度の高い地域には戻
れない、それはチエルノブイリを見
てもわかることなのだから、早く
土地を買い上げるなどの対策、補
償をしてほしいことなど、福島県
出身の大使の言葉は続きました。
甲状腺がん以外のがんのデータに
ついてはチエルノブイリ事故前、
旧ソ連時代は医療体制は制度的
にはあったけれど中身が充実して
いなかったもので、データはなかつ
たと言っている、統計は鵜呑みに

《参加者一覧》

清水 一雄
(医師/日本医科大学)
竹間 由佳
(医師/日本医科大学大付属病院)
村瀬 幸宏
(臨床検査技師/同病理部)
亀井 信孝
(日本医科大学5年生)
木佐森 舞夕
(日本医科大学5年生)
眞田 麻梨恵
(日本医科大学5年生)
庄田 有里
(日本医科大学5年生)
城 景子
(CMN会員)
占部 正彦
(朝日新聞記者)
川瀬 充久
(産経新聞記者)
河野 揚
(中国新聞記者)
山田 英雄
(ロシア語医療通訳)
福間 由紀子
(ロシア語通訳、CMN会員)
川原 秀之
(CMN理事)

《支援物資・支援金》

■ベラルーシ赤十字
検診車「雪だるま2号」維持費
\$1,500
■ミンスク10番病院
医療機材等購入費
\$1,000
■プレスト州立内分秘診療所
医療機材等購入費
\$2,000
医療支援物資
■福祉工房「のぞみ21」
工房運営カンパ
\$2,835
■NGOO「コンフィデンス」
活動運営カンパ
\$900



してはいけない、とのことでした。学生さんからは食の安全についての質問も出て、それに関してはベラルーシでは厳しい食品検査が行われているということでした。

熱心なやり取りに予定時刻を大幅に過ぎて第2の訪問地であるミンスク10番病院に到着。翌日清水先生の手術を受ける患者さんの診察、清水先生の講演、支援金の贈呈などを、なんとか済ませることができました。

広島大学で学び、この春まで日本大使館に勤務していたバレリーさんも新聞社の皆さんの通訳として加わることになり、最初の夕食をなごやかにとりました。

ホテルに戻ると受付で、「明日は何時にチェックアウトするのか、14人分の精算は時間がかかるのか、今できないか」と言われました。なるほどそれから30分以上精算に時間がかかったので、翌朝では出発に支障がでるところでした。なぜそんなに時間がかかるのか不思議ですが、赤十字のおかげで宿泊費が安くなっているのはとてもありがたいです。

9月27日、この日はミンスク10番病院で、清水先生の手術が行われました。ほとんど出血もなく無事に終了し、大成功でした。(手術についての詳細は次号に掲載予定の清水先生の報告をご参照ください。)

新聞記者の皆さんと城さん、川原さん、福間は非常事態でチェルノブイリ事故後の対策や補償などについて取材する予定でしたが、アポイントメントがうまくいかず、この件については、ベラルーシ医学再教育アカデミーで、お話を伺いました。内容としてはスクリーニングについては最初は汚染地域だけ行われていたけれど、今は様々な地域でプログラムを組んで毎年行っていることや、甲状腺がんが事故後増えていることは確かだが、他のがんについては関連性が分からないこと、甲状腺がんは手術で治る率が高く、手術した子どもたちはほとんど元気で現在も過ごしていることなどが語られました。日本へのアドバイスを問うと、長年チェルノブイリを支援し、研究している優秀な医師が



プレストでの甲状腺がん検診に訪れた患者さんへのインタビューを行う筆者(左)



プレスト州立内分分泌療所の受付に貼ってあった東日本大震災の支援金募集のポスター



ミンスク10番病院にて手術を受ける患者さんについて打ち合わせをする

日本にはいるのだから、もし今後甲状腺がんにかかる人が増えても、適切な対策がとられるでしょう、日本はヨーロッパに比べるとともと甲状腺疾患が多いので、ベラルーシより甲状腺の治療技術が進んでいて経験豊富なのだから、と言われました。

インタビュー後、手術を済ませた先生たちと合流してプレストに向かいました。

9月28日、プレスト州立内分分泌療所訪問。この通信に何度も登場するアルツール医師が院長を務める診療所ですが、昨年までとは違う場所に引っ越していました。移動検診で甲状腺の異常が認められた患者さんがこの日集められ、エコーで診察した後、疑わしい人は吸引穿刺^{せんし}を受け、細胞診をするためのプレパラートを村瀬さんが作って顕微鏡で見るという作業が例年通り行われました。学生さんたちも患者さんの触診をしたりして検診に参加しました。私は吸引穿刺を受けた患者さん数人にインタビューしました

が、印象的だったのは甲状腺の異常に気がついたのは検診を受けた時が初めてで、それまでは全く自覚症状がないということでした。移動検診の重要性を強く感じました。

その後、プレスト州立病院に行き、翌日手術する患者さんの診察、打ち合わせをして、内分泌診療所にもどり、ウラジミール医師によるプレスト州における甲状腺がんのスクリーニング調査について講義を受けました。また、アルツールさんとウラジミールさんによる福島への助言を求めると、以下のようないことが挙げられました。

- 1、人々の不安を減らすために正しい情報が出されなければならない。
- 2、正しい公衆衛生を徹底すること

- 子どもたちにはバランスのとれた汚染されていない食物を与える。
- シャワーを浴びて放射性物質を洗い流す。
- 規則的な排泄習慣。
- 免疫機能を高めるために睡眠をよくとる、色々な種類の食べ物をとる。

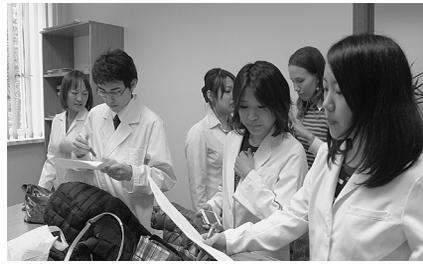
眠をよくとる、色々な種類の食べ物をとる。

このような公衆衛生的な面は自分でできることなのですぐに実践して欲しいと言われました。また、アルツールさんは、事故後こちらではヨード対策が何もなくさなかつたけれど、ヨード剤がすぐに配られたポーランドでは甲状腺がんの問題はない、チェルノブイリの影響は、事故後100年まで見ていかなければならない問題だろう、と熱心に答えてくださいました。そして、「日本でもスクリーニングをするのなら、喜んでお手伝いをしましょう」と付け加えられました。この診療所の受付には東日本大震災への支援を呼び掛けるベラルーシ赤十字のポスターが貼ってありました。

9月29日、プレスト州立病院で2回目の手術。今回も大成功で、地元の新聞社の取材もあり関心の高さがうかがわれました。ここでは以前の清水先生の手術を参考にして、自分たちで見よう見まねで手術用の吊り下げ器具を作



現地NGOコンフィデンスのイリーナさんが届けてくれた子どもたちの絵



白衣に着替えた日医大のみなさん(プレスト内分泌診療所にて)



プレストでの甲状腺がん検診エコー検査を行うマリーナ医師

り、すでに18件も同じ手術方法で実践しているそうです。

内分泌診療所ではこの日も村瀬さんが細胞診を引き続き行ない、今回来院した患者さん全ての細胞診を終了しました。2007年に日本で清水先生の手術を受けたアリオシヤさんも来てくださって、一年ぶりの再会を喜び合いました。

9月30日、プレストを発ち、ミンスクへ。到着後はベラルーシ赤十字を訪問。カルヴァノフ総裁から事故後のベラルーシ赤十字の対応として、被災者の線量の測定や予算の獲得の協議、放射線恐怖症対策、体内にとりこまれた放射性物質の排除のためのペクチンの利用が行われたことなどについてお話を伺いました。また、日本でも放射線恐怖症が問題になると思われるが、一番大事なことは具体的に正しい情報を伝えること、精神科医の検診への参加の必要性にも言及されました。ちなみに、大きなスーパーでペクチンが販売されているのを見つけたのですが、

説明書には堂々と「放射線病の予防、放射能汚染地域での放射性核種の排出」と書かれていました。こういうものがスーパーでサプリメントのように並んでいるのは、異様な光景でしたが、日本でも、もしかしたら近いうちに同じような状況になるのかもしれない。

夕方にはコンフィデンスのイリーナさんがホテルで、新聞社の皆さんのインタビューに応じました。CMNには子どもたちが日本の被災者のために書いてくれた絵が贈られました。リユータさんも娘さんと一緒にきてくださいました。

10月1日、日本医大の皆さんと福岡はこれで訪問日程を終えモスクワ経由で帰国、他の皆さんはゴメリへと向かいました。

訪問を終えて。

報告／
福岡由紀子

今回はモスクワ空港で手術器具がX線検査に引っかけたりベラルーシに持ち込みめるかどうか危うい思いをしたことを皮きりに、様々なハプニングがありました。手術は2件とも成功、無事に全員帰国できたことをまずは喜びたいと思います。色々反省すべき点もあり、今後の課題として検討すべきだと思えます。また、ベラルーシで得た様々なアドバイスや情報も生かしていければと思います。

10月9日から日本でも福島18歳以下36万人に対する甲状腺検査が始まりました。きめ細かなスクリーニングをするには甲状腺の専門家が数多く必要となるでしょう。医療関係を志す若い人たちの間から、この分野に進む人がたくさん出てくれることを期待したいと思います。

被災地で見たこと、感じたこと 医師をめざす学生の視点から

被災地の医療者たちの熱意を実感

日本医科大学5年生

亀井 信孝



プレスト第11回検診には日本医科大学から4名の学生さんがボランティアで参加してくださいました。これから医師をめざす若いみなさんにとって、異国の医療現場はどんなものだったのでしょうか。感想を寄せていただきました。



プレストでの甲状腺がん検診にて

ベラルーシで活躍されている日本医科大学内分沁外科教授の清水二雄先生の講義を受けました。その授業でベラルーシの現状、先生がベラルーシで何を行ってきたかを説明されました。以前から先生と一緒にベラルーシに行かれた方から話を伺って漠然とベラルーシとはどのようなところなのか行ってみたいと思っていました。そして講義を受け具体的なことを聞くことにより、聞くよりも行って見たほうが分かる

と感じ先生に懇願しベラルーシを訪れることになりました。

実際に行くまでベラルーシとはどのような国なのか全く分かりませんでした。

ら家が点々とある霧
囲気なのかな、などイメージしていました。お湯が出るのか、電気はちゃんとつくのかなど多少の不安を抱きながらベラルーシに行きました。

いざ行ってみると思っていた風景とは違いビルもあり車も多く走っており、思ったよりも快適に過ごすことが出来ました。ホテルではお湯は当然のように出て、またインターネット環境も整備されていました。首都ミンスクには地下鉄も走っており、その点でも驚きを感じました。

以前より清水先生はベラルーシで独自にのみ出された内視鏡による甲状腺に対する手術をされました。現地の医療従事者はその手術を見よう見真似で、足りない器具は自分達で作って手術を行ったと聞きました。今まで自

分自身が日本で見てきた病院よりも性能の劣る器具やさびついてしまった手術器具しかないような環境の中、先端の医療を行っているという事実が驚かされました。熱意があれば環境は最低限あればよく、お金が不十分でもなんとかするという気持ちで乗り越えることが出来ると感じました。

今回ベラルーシに訪問し、日本では体験できないことを自分の肌を通して感じて経験することができました。日本の医療現場がいかに恵まれているのかを、現地の医療者たちの熱意の大きさを知りました。「百聞は一見にしかず」という言葉がありますがまさにそのとおりだと今回のベラルーシ訪問を通して感じました。今後は福島第一原発により日本でもベラルーシと同様に甲状腺に異常を伴った患者さんが増えることと予測されています。この経験と感じたことを活かし医師として熱意を持って取り組んでいきたいと思えます。

今回の経験を生かし、多くの人に 貢献できる医師になりたい

日本医科大学5年生
木佐森 舞夕



傷跡が残ってしまった

が、VANS法ではほとんど傷が分らないほどきれいに治癒する。

甲状腺がんは若い女性が多いこともありこの方法により非常に手術に

対する精神的負担が軽くなる。この手術方法がベラルーシに広がって、一人でも多くの甲状腺がんの患者さんに喜んでもらいたいと思った。

これらが今回ベラルーシでの甲状腺検診と甲状腺内視鏡手術に参加した主な理由である。そして、実際にベラルーシで実習を行い、非常に素晴らしい体験が出来たと感じている。まず、ベラルーシという社会主義国の現状、生活を知ることができ、想像していたより豊かな生活をしていることに驚いた。また、現地での医療の現場に触れることができ、日本の医療の素晴らしさを感じたのと同時に、ベラルーシの医療もどんどん新しいものを吸収し、進歩していることも感じた。

また、今回特に心に残ったこととして、清水先生方がベラルーシに来て、エコーや吸引穿刺や病理の教えた技術を確実に自分の技術とし、さらに向上させ患者さんを救っているという現場を見ることが出来、非常に感動した。

そして、プレスト州立病院で一度清水先生のVANS法を見ただけで、自分たちで手術器具をつくり、18例も内視鏡で甲状腺手術を行っていることを聞いたとき、プレスト州立病院の先生方の向上心が素晴らしく、清水先生がなし得たいことが実際に起きていて本当にうれしく思った。

この素晴らしい経験が出来たもの、清水先生、チエルノブイリ医療支援ネットワークに関係する多くの方のおかげであり感謝しています。そして、この素晴らしい経験により、医学に対するモチベーションも上がり学生中に多くのことを学び、そして多くの人に貢献できる医師になりたいと思っております。また、福島原発事故に対してもこの経験を生かしたいと考えております。



触診を行う木佐森さん

年に1回、ベラルーシでのチエルノブイリ事故後の甲状腺がん検診と甲状腺内視鏡手術を清水先生が行っていることを知ったのは、4年生のときの清水先生の講義であった。チエルノブイリ原発事故は私の生まれる2年前の1

986年のことであり、この事故によりどんな影響があるのか詳しく知らなかった。甲状腺がんの発生が確実に増えたことも清水先生の講義で初めて知った。
私は元々海外の医療や、発展途上の国の医療に興味を持っていたこともあり、この活動に興味を持ち、実際にこの検診や手術がどう行われているか、現地の医療はどうなっているのか自分の目で見て、体験したいと思った。また、清水先生が開発した甲状腺疾患に対する内視鏡下手術(VANS法: video-assisted neck surgery)を甲状腺がんが増えたベラルーシに広げ、貢献しようとしている姿が素晴らしいなと思ったため、すぐに清水先生に参加を申し込んだ。何もなかった所に新しいものを持ち込みつくり出すということはそう簡単にできることではない。それをやっている清水先生に大変興味を持ち、実際にその現場を見たいと思ったからだ。
今まで甲状腺手術では首に大きな



2009年10月、プレスト州立病院にて、チエルノブイリ被災地内視鏡を使った甲状腺摘出手術が清水

医師の執刀のもと行われた。翌2010年は首都ミンスクにて、今回はミンスク、プレストで各一例の内視鏡手術が行われ、いずれも成功した。(写真は2009年)

未だ影響の残るチエルノブイリを 風化させてはならないと感じた

日本医科大学5年生

眞田 麻梨恵



た。しかし全く印象が違った。7階程のビルが多く並び、人と車と路面バスが道路を行き交う活気のある街だった。

病院はベラルーシと日本で雰囲気異なっていた。

日本の病院内を歩くと窓のついた引き戸が並んでいるのだが、ミンスクの病院は窓のない木目のドアが並んでいた。病室内は個人を仕切るためのカーテンはなく、病室よりも寮のようであった。あまり患者さんのプライバシーまで配慮できるような余裕がないのかもしれないと思った。日本では使い捨ての布や手術着を用いるが、ミンスクの病院では布を消毒して繰り返し使っていた。手術器具もはさみの切れ味やピンセットのかみ合い具合から経済的な差を感じた。しかし現地医師の方々は熱心で新しい技術を学ぼうと多くの医師が手術の見学に来ていた。プレストの病院は2回目の手術であったのだが、1回目の手術以来、彼ら自身で内視鏡手術を行っていることがわかった。内視鏡手術は時間と手間が普通の手術よりかかり、受け入れられるか気になっていたの

で、この事実は大変うれしかった。今

後、ベラルーシの医師によって広められるようになれば、より多くの人にこの手術が可能になる。傷跡に悩まされる患者さんを減らすために一人でも多くの医師に広まってほしい。

また甲状腺がん検診を見学した。すでに精査の必要があると判断された人が検査に来るため、非常に多くの甲状腺疾患をもつ人を診た。経過観察と診断された人が多かったが、原発事故から時間がたっているのにもかかわらずいまだに多くの人が甲状腺疾患を患い続けていることから事故の重大さを痛感した。

私はチエルノブイリ事故の後に生まれたため、この事故当時の様子を想像することしかできない。この事故をリアルタイムで知った人に比べると印象が薄い。こうして事故の風化は進むのだと思う。しかしまだ影響の残るこの事故を風化させてはならない。福島事故をきっかけに日本とベラルーシの協力関係をさらに深めて病気の治療や検診を今後も続けてほしい。私自身協力していきたいと思う。



上)プレスト要塞にて医療通訳の山田さんより説明を受ける
下左)プレスト州における甲状腺がん検診について講義を受ける
下右)プレストの街並み



このベラルーシでの医療支援を知ったきっかけは清水教授による授業であった。その後の3月に日本で地震による津波にのまれた福島原子力発電所が水素爆発を

起こし、大量の放射性物質を放った。同じく放射線の影響が生じたチエルノブイリ原発事故で影響を受けた国はいったいどうなったのか気になり、自分の目で確かめたいと思っ加を決意した。

ベラルーシは

静かで薄暗い国だと思っ



左) ベラルーシ赤十字にて
右) プレスト州立内分秘診療所にて

ベラルーシでの経験を活かして 甲状腺がん患者を助きたい

日本医科大学5年生
庄田 有里



今回参加しようとした動機は、3月の福島原発事故でした。この事故により日本も放射線汚染国となったことを知り、チェルノブイリと同じ状況になつてしまいかもかもしれないと思いました。今後日本でも甲状腺がん患者が増える可能性があり、自分が医師になつたとき役立つ経験が積めるかもしれないと感じ、地震の数日後、清水教授に参加をお願いしました。

ベラルーシに行く決断をしてからは、チェルノブイリ原発事故や内部被曝に関する本を何冊か読み、知識を深めようと努めました。知れば知る程原発事故による外部被曝や、特に食物による内部被曝の恐ろしさを知り、正直行く前は不安が膨らむ一方でした。

しかし実際のベラルーシは、日本大使館の松崎大使によると、国の食の安全などに対する管理がしっかりしているため内部被曝の心配

は無いとのことなので、安心して食事を楽しむ事が出来ました。ベラルーシはルカシエンコ大統領による独裁国と聞いてはいましたが、ミンスクやプレストの街は予想以上に賑やかで栄えていました。見たこと聞いたこと全てが勉強になり、ベラルーシの歴史や政治、食文化や人柄、そしてチェルノブイリ事故当時の様子や事故後の生活なども学びました。

ベラルーシの旅のメインイベントは甲状腺内視鏡手術でした。一見チェルノブイリ原発事故の面影が無いように見られたベラルーシの街でしたが、一度病院に足を踏み入れると、被曝による多くの甲状腺がん患者さんと対面する事になりました。とてもショックだったのは、私と同世代くらいの子供の甲状腺がん患者さんが沢山いたことです。患者さんの中には0〜4才くらいの時に100〜200kmも離れた土地で被曝し、十数年後に甲状腺がんを発病している人

もいました。これを福島原発事故に当てはめると、避難区域でない土地に住んでいる人たちも被曝を受けており、将来発がんする可能性があるということになります。政府が「危険はない」と言う土地に住む人たちは、何も知らずに被曝し続けてしまうでしょう。ベラルーシに行つて確信したことは、「将来、東北地方に甲状腺がん患者が増える」ということです。もしこのような悲劇が現実になった時には、この経験を活かして貢献したいと思います。それに備えて、今は高いモチベーションで色々なことを貪欲に学んでいきたいと思います。

次号掲載予告

次号では今回原稿を寄せていただいた亀井さん、木佐森さん、眞田さん、庄田さんと、同じく今回初参加の竹間先生のインタビュー記事を掲載予定です。どうぞ楽しみに。



20年ぶりのベラルーシ訪問 プレスト第11回検診団に同行して

今年チェルノブイリから25年、さらに福島での原発事故があり、風化しつつあったチェルノブイリに再び注目が集まりました。今回のベラルーシ訪問でも新聞記者の方々の同行があり、関心の高さが伺えました。20年ぶりにベラルーシを訪問された朝日新聞記者の占部さんからの報告です。

大分県中津市 占部 正彦
(朝日新聞記者)

とすると同時に「20年前に取材した被災者たちはその後、どうなっただろうか」と気になりました。また、「チェルノブイリ被災地の放射能対策に学ぶことがあるに違いない」とも。

ちょうど、CMNが、通算20回目の検診団を派遣すると知り、同行取材を申し入れ、今回の取材旅行となりました。

特に印象に残ったのは、首都ミンスクでベラルーシ日本大使館を表敬訪問したことでした。臨時代理大使の松崎潔さんは福島第一原発に近い福島県いわき市出身。松崎さんは「この国の人は日本人に同情してくれている。(震災と事故後の)日本人の秩序だった行動は強い印象を与えている。テレビの特別番組もいくつかあったが、非常に好意的な報道だった」と語ってくれました。チェルノブイリ原発事故後、日本のNGO(非政府組織)が「よく見

20年ぶりのベラルーシでした。私はチェルノブイリ原発事故が起きて5年後の1991年6月、「チェルノブイリ医療支援ネットワーク(CMN)」の前身であるチェルノブイリ支援運動・九州の第1回医療調査団に同行し、放射能の被害に苦しむベラルーシとウクライナの人たちをレポートしました。「2度とこんな大惨事が起きないように」と願って。

それが、この3月11日。東日本大震災と福島第一原発の事故。私は、まさか日本でチェルノブイリと同じ「レベル7」の事故が起きると思っていませんでした。いつの間にか安全神話に流されていた自分に愕然



右) ミンスクのホテルにて、写真左が占部さん
左上) 最も被害を受けたゴメリの街並み
左下) 取材に応じてくれた「のぞみ21」スタッフの皆さん

える支援」をし、日本政府、日本赤十字など官民挙げての支援があったことが高く評価されていることも。チェルノブイリ原発に最も近いゴメリでは、甲状腺がんの手術を受けた女性や、経済的に苦しい患者らを支援する民間団体「のぞみ21」のスタッフらにも会うことができました。「のぞみ21」では患者らがつくった伝統模様の刺しゅう入りエプロンやコースターなどを販売していますが、最近注目が減って困っていると話していました。女性たちからは「放射能が怖いから子どもをつくらない」「できればどこかに避難したい」「病気で満身に学校に行けなかった。ちゃんと教育を受けたいればもっといい仕事につけたのに」などと切実な言葉ばかりを聞きました。ベラルーシを離れるに当たり、彼女たちが幸せであるよう祈るとともに、日本政府は一刻も早くチェルノブイリに学ぶべきだと痛感しました。



プレストから一旦ミンスクへ戻り、先に帰国する検診団と別れ、調査団メンバーへゴメリは向かいました。ベラルーシ南部に位置するゴメリ市には、チェルノブイリ原発事故の被災者や障がいを持つ若者たちが働く福祉工房「のぞみ21」があります。「のぞみ21」ではスタッフがそれぞれの体調にあわせて、刺しゅうや縫製、木工などの仕事に取り組んでいます。今号では工房スタッフへのインタビューをまとめたものを紹介します。写真はゴメリ市内の風景。

福祉工房「のぞみ21」訪問 汚染された大地で生まれ育って

事故がなければ、健康に問題はなかった

のときに知り合った。現在工房は閉鎖し、スタッフの自宅で作業を続けている。私の今の仕事は自動車部品工場の守衛。朝8時から夕方5時まで。月約100ドル。ほかの仕事我希望したが、転職は難しい。

チェルノブイリの事故がなければ、健康に問題がなかった。病気のために生活にゆとりはなかった。汚染地域の子どもには健康でない子どもも多い。福島でも深刻な問題になると思う。

何が何だかわからず、パニックになった

と言われ、校庭の土も入れ替えられたと聞いた。

チェルノブイリ原発事故が起きたのは小学3年生の9歳のときだった。テレビやラジオでは事故について伝えられず、5月はじめごろに人々の間で事故のことがうわさになり、パニックになった。

私の生まれ育ったゴメリが汚染地域だと周りの大人たちが知ったのは、事故から数ヶ月後、除染作業が始まってからだ。5月の終わりから6月にかけて、中央通りで散水車が水をまいていた。突然のことで、何が何だかわからなかった。学校の屋根も取り替えられた。近くによってはいけない

術後約10年間は、ミンスクの病院で検査を受けた。その後はゴメリの病院で検査を受けた。経過は良好だった。今は健康だけど、風邪を引きやすい。でも楽天的だから、病気をしても治ればいいと考えている。

16歳のころ、甲状腺に異常を感じ、ゴメリの病院で診察を受けた。その後ミンスクの病院でも検査を受け、2週間後に手術が行われた。医師からは直接「がん」だとは聞かされなかった。当時は状況がよく分からず、不安や恐怖を感じた。

ベラルーシでは福祉施設が整っておらず、障がい者の働き場が少ない。「のぞみ21」のナターシャさんとは17歳



Profile

エレナ・ニコフさん
1977年5月28日生まれ。刺しゅうの図柄作成や複雑な裁縫や刺しゅうを担当している。2000年には工房経営者のナターシャさんらとともに来日し、チェルノブイリ被災地の現状を伝えた。

ゴシケービッチ

奥州を行く①

大島 幹雄

安政7年(一八六〇年)2月、江戸での仕事を終えたゴシケービッチは、奥州街道を北上し、函館へ戻った。外国人としては初めて奥州街道を旅したことになる。

この旅についての詳しい資料が、『地域資研究』はこだて『19号(一九九四年発行)に収められている。この資料をもとに、ゴシケービッチの奥州街道をふりかえってみたい。

清水恵氏がまとめた「安政7年のロシア領事奥州街道通行に関する三つの史料」には、この旅に同行したアルブレ

ヒト夫人の手紙の抜粋と青森県三戸にゴシケービッチたちが宿泊した時の模様を代官所の役人が書き留めた見聞記、福島を二行が通過したときの記録が収められている。

これらによると、ゴシケービッチが江戸を旅立ったのは2月15日、ロシア側はゴシケービッチの他4名(妻と息子、アルブレヒト夫人と下女)、同行した日本人の役人は付き添いも含めて30人ほどであったという。

千住で最初の晩を過ごしたゴシケービッチたちは、越谷、宇都宮、二本松、仙台、盛岡などで宿をとりながら、24日目に下北半島の佐井に到着、ここから船にのって3月10日に無事函館に着いている。旅は毎日朝6時に宿を出発、1日6里から11里半かけて走行し、夕方5時か8時には宿に着いた。

ロシア人は全員駕籠かごに乗って旅をした。ロシア人たちにとつて、この駕籠に乗ることは一大事であったようだ。

函館ロシア領事館付きの海軍軍医のアルブレヒトの妻が、書き残した手紙にこんな一節がある。

「駕籠の窮屈な扉から入るために、散々腰を曲げねばな

らず、私たちは誰もが苦勞しました。習性で頭より先に足を入れなくて、頭は先ず前もって駕籠の中へ押し込み、そのため両足を外へ残さざるを得なかったのです。」

不自由な思いをしながら乗っているロシア人一行の駕籠を真ん中にして、日本人の役人を乗せた駕籠が前後を挟むように、二行は奥州街道を北へと進んでいった。大名行列のように、槍を持った兵が付き添い、長いこん棒を持った警備兵が配され、荘重な足取りで駕籠の両脇を固めていた。さらに行列の前のほうでは、警備兵が街道沿いの通行人たちに、ひざまづくように命じていた。この様子がよほど珍しかったのであろう。アルブレヒト夫人は次のように書き留めている。

「前方に同じく幾人かの警備人が異口同音に拍子をとって「スワル」「スワル」(座ること)と叫んで歩きました。この絶対的なことばで、町や村では道を歩く通行人や住民がひざまづき、我々の行列が通り過ぎるまでそうしていました。」

最初の宿泊地千住に着いたゴシケービッチたちは、そこで準備された宿におそるおそる足を踏み入れた。

「寒さでふるえながら駕籠からお

り、くすぶって炭酸ガスのこもった農家に入るのだろうと予想しましたが、私たちに準備された部屋へ通されたとき驚いて嬉しくなりました。その部屋は十分な広さで、美しい壁紙が貼られ、家具さえ備えられました。」

ゴシケービッチたちのために幕府は、泊まる予定の宿場に細かい指示を出していた。椅子やテーブルを調達するだけでなく、それはテーブルの上にかける緋毛せん、壁に絵、香炉にいたるまで、実に細かい気配りを見せている。どの宿場でも同じように、手配がなされていることにアルブレヒト夫人は驚いている。

「どの宿場でも前もって準備された同じような家具にお目にかかり、日本政府の心遣いに感謝しながら、私たちはもはや、道中準備のために要した長い期間に驚かなくなりました。」

宿舎については満足していたゴシケービッチ一行であったが、日本側が準備した食事には、かなり辟易したようだ。食事をめぐる話題については次回見てみたい。

ベラルーシ 紹介 歴史 編

ゴシケービッチ ノート

③

連載

大島幹雄／ドキュメンタリー作家

昭和二八年宮城県石巻市生まれ

早稲田大学露文科卒業

いまさら人にはきけない?! 7がいの内部被曝って? チェルノブイリ

イヤ意外と知らない



マーシヤがベラルーシからの来日中にまさかこんなことになるなんて

残念だけど、この8ヶ月間

チェルノブイリの教訓は活かされなかったようね...

マーシヤが甲状腺がんになったのは、放射性ヨウ素が原因だって言ってたよね

ええ

ヨウ素は、半減期が8日だから、もうだいぶ減ってるはずだけど



今の日本で注目されているのは、セシウムね

って言われたってさー、どうすりゃいいの??

被曝には外部被曝と

内部被曝があるの

身体の中に入っちゃうと、内側から放射線を浴び続けることになってしまつたら危険なんだね



付け加えて...
放射能はヒトからヒトへうつたりしほいよ!!
ギャ

内部被曝を防ぐのに、特に気をつけなきゃいけないのは食事ね

それから、子どもや赤ちゃんは、大人よりも感受性がずっと強いから、気をつけて



チェルノブイリ事故後は、セシウムが原因で病気になる人たちがもいるの??

事故後、今までに子どもたちに増えているのは

免疫疾患や呼吸器感染、貧血、疲れやすさ、未熟児や先天性異常

などが報告されているわ



でも、甲状腺がんのように、被曝との関係が証明されているものはないの



放射性物質には味がわからないから、食べちゃってもわかんないよ

数字として見るしかないよね



今日日本では、市民が放射能測定所をつくるなど、さまざまな取り組みをはじめているわ



それでもすべてはわからないから、色々な種類のものを食べて、危険性を減らすというのもひとつの考え方ね

それに、被曝したら必ず病気になるわけではなく、免疫力が強ければ、自力で細胞の傷を治せることもあるの

あなたには、今まで通りすくすくと育ってほしいな



ふう... 3月11日よりも前と今とでは、いろんなことが変わってしまったんだね

ここから、どんな未来をつかっていくか、今いるわたしたちにかかっているのよ



事務局日誌より 主な活動報告



日々の活動の様子は、HPの「事務局スタッフブログ」でも紹介しています。
<http://www.cher9.to/>

◆9月30日 高須中学校へ講師派遣



講演中の河上理事長

北九州市若松区にある高須中学校へ講師派遣に行ってきました。対象は3年生の約200名。チエルノブイリの他、福島原発関連の写真やデータも加えました。講演後、生徒の皆さんに感想文を書いてもらいました。いくつか送っていただきましたので、翻訳してベラルーシへ届けたいと思います。

◆10月16日 ハートフルフェスタ福岡2011



ボランティアの小野さん

毎年恒例のイベントですが、今年はブース出展に加えフリマにも参加しました。多くのご来場があり、出展ブースには会員さんも来ていただきました。感激です！スタッフの他、ボランティアさんの終日参加もあり、賑やかなブースでした。詳しくは事務局ブログでも報告しています。

◆10月12日、11月3日 テレビ出演



ジェイコム収録



今日感テレビ収録

11月5、6日開催の、福岡で活動する国際交流・協力団体が一堂に会する「国際協力フェスタ・地球市民」に2011PRRのため、ジェイコム福岡とRKB毎日放送へ行ってきました。参加団体スタッフの皆さんと一緒に、活動国の民族衣装を着てイベントを宣伝。もしかしたら放送をご覧になった方もいらっしゃるかも？

11月3日のRKB「今日感テレビ」PRコーナーではマトリョーシカちゃんが出演しました。広報の効果もあり、5、6日のイベント当日には1000人以上のご来場があったそうです！詳しくは事務局ブログでも報告していますので、ぜひご覧ください！

◆11月5日、6日 地球市民どんたく2011



賑わうブース

今年もブースを出展。福祉工房のぞみ21から雑貨を入荷した直後だったのでマトリョーシカやリネン雑貨をたくさん展示できました。また別室での講演にてチエルノブイリの報告を行い、20名以上の参加がありました。福島から避難されているうのさえこさんにもゲストとしてお話をさせていただきました。

2012年度

通常総会のご案内

2012年度通常総会を開催します。今年一年間の活動報告と、来年度の計画を検討します。正会員（議決権あり）でない方もオブザーバーとして参加できます。

●日時：2012年2月18日（土）18時30分～

●場所：福岡市人権啓発センター研修室
（福岡市博多区下川端3番1号）

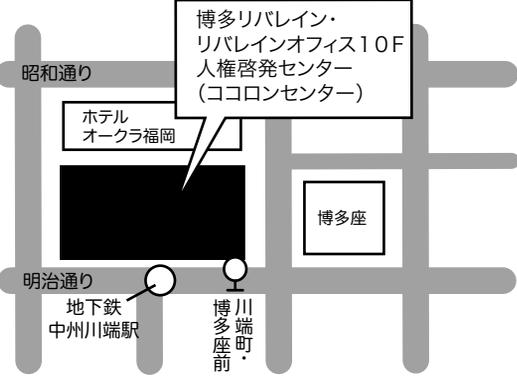
博多リバレイン・リバレインオフィス10F

●内容：今年度事業報告・収支決算報告および承認

次年度事業計画・収支予算の承認など

★資料の準備があります。参加ご希望の方は事前に事務局までご連絡ください。

地図はこちらです。総会終了後に、プレス第11回検診の帰国報告会を行います。あわせてご参加下さい。



*福岡市営地下鉄「中洲川端」より徒歩1分
*西鉄バス「川端町・博多座前」より徒歩1分

ココロンセンター TEL: 092-262-8464

※会場は変更になる場合があります。詳しくは事務局までお問合せください。



報告／長谷川 遥香
(福岡教育大学教育学部4年生)

チエルノブイリは遠い世界の出来事 という認識はガラリと変わりました。

9月2日から14日までの2週間、インターシップをさせていただいた長谷川です。元々NGOの活動に興味を持っていましたが、本格的に関わらせていただいたのはCMNが初めてです。3月に福島第二原発事故が起こり、これから日本はどうなるのかと不安を感じてい

るとき、インターンシップ企業名の中にCMNの名前を

拝見してすぐに「ここだ!」と思い、やってきました。

事務局の三島さんとはすでに別のイベントでお会いしていたので、初日からすぐに事務局に打ち解けることができました。最初の仕事はコピーカタログの

商品の差し替え、そして会報に同封する福島原発事故の募金口座開設のお知らせを作ることでした。いきなり福島原発に関わる仕事をさせてもらえるとは思っていなかったのが驚きでしたが、できるだけ見やすく、わかりやすいものを作ろうと作業に打ち込みました。結果、無事に会員の皆さまに送付することができました(※前号同封したオレンジ色のチラシです)。

インターン中で一番大変だった仕事は、会報の発送作業でした。名簿整理から始まり、大量の資料印刷、宛名シール貼り、そして封入作業。全て単純作業なのですが、量がとても多くて大変でした。ですが、裏を返せばそれはCMNの活動がたくさんの方々の応援のもとに成り立っているのだという何よりの証だとも気がきました。宛名を見て、自分が行ったことのない日本中のあちこちでCMNを応援してくださっている方々がいるのだと実感しました。

まだ完成には至っていませんが、現在福島第二原発事故を主軸に、日本の原発についての資料を作成しています。イ

ンターン中に終わらなかつたのですが、とつともない量の情報をまとめきれず、また専門的知識が問われたりと、思うように作業が進みませんでした。今もなお放射能への恐怖を抱えながら暮らしている方々を思うと、「簡単にまとめすぎではないけない」という責任も感じ、時間をかけて作った方がいいと判断しました。次のイベントまでには間に合うように作り上げたいと思います。

インターン中に、震災から半年を迎えました。そして今年にはチエルノブイリ原発事故25年目という節目の年です。チエルノブイリ原発事故発生時にはまだ生まれてすらいなかった私にとつて、チエルノブイリはどこか遠い世界の話でした。ですが、今年でその認識は180度変わりました。25年経ってもなお爪痕が残ったままのチエルノブイリの姿は、福島への予言であり、チエルノブイリから学ばなければならぬことがたくさんあるという証拠でもあると考えるようになりました。

2週間、そのことを頭においてインターンをさせてもらいましたが、まだまだ知りたいこと、自分自身で活動したいことは残っています。今後は、ボランティアとしてCMNに関わらせていただき、チエルノブイリと福島を微力ながらも支援できたらと思っています。短い間でしたが、ありがとうございました。



「インターン」とは、勉強中の学生が、社会で働くとはどういうことかを知るための、短期の職場体験です。CMNでは2005年より福岡教育大学(宗像市)からインターンを受け入れています。はっしー(左)による2週間のインターン体験レポートをどうぞ。写真は10月16日の「ハートフルフェスタ福岡」にて、ボランティアの平川さんと一緒に。民族衣装を着て、はい、チーズ!

たくさんのご支援を ありがとうございます。

(順不同・敬称略)

浅原望樹 有竹悦子・容子 石川治療院 石川雅之 井上裕子 岩本洋子 江藤俊一 大石楊子 太田千賀子 岡原あずさ 片山美奈子 河上しげみ 川辺希和子 川村りら 木下るみ 串山益子 倉持佳徳 グリーンコープ生活協同組合ふくおか 古賀千種 坂口直子 貞池和恵 定村洋子 サトウ矯正歯科クリニック 島田まゆみ 菅野暢子・晋平・永江麻里子 高津尚世 高山幸子 友成眞子 長瀬弥生 長棟かおる 西本智美 日本医科大学学長 田尻孝 野崎千代 野原初五郎 前田恵子 松下卓治 丸山さより 村上和代 森悠子 過定智子

〔都道府県別〕

【福島県】1名 【東京都】2名 【茨城県】2名
 【長野県】1名 【三重県】1名 【京都府】1名
 【兵庫県】2名 【島根県】2名 【広島県】1名
 【山口県】2名 【福岡県】14名 【長崎県】4名
 【熊本県】1名 【大分県】4名 【宮崎県】1名

●マンスリーサポーターの皆さん

相川靖 相羽美香子 石本祥二郎 磯道綾子 一瀬和美 稲田照子 井上礼子 上田英子 植田清子 内野和美 内野千鶴子 延壽富美 大麻卓子 大久保伸子 大久保弘子 大崎知恵 太田昌子 大場満 片岡八重子 金山涼子 紙森優子 河上雅夫 川崎君子 川崎清美 川尻愛子 木村雅子 古賀輝洋 後藤宇企子 財津悠子 斉藤美代子 坂口馨子 櫻井美喜子 佐竹早苗 佐藤二江 佐藤進一 佐藤照子 城景子 白浜千恵子 首藤展子 高山知佐子 竹田恵子 武田孝子 田中京子 珍部千鳥 土持秀男・由利子・朱加 綱脇牧子 坪川裕子 富永隆史 友景忍 鳥井原桐子 鳥原良子 永江之子 永尾ゆかり 永野沙智子 中村洋子 榎崎悦子 西井えりな 西首延子 丹羽道代 納富育代 平原久子 廣松初美 深川哲臣 福井初子 福本勲子 藤本孝子 洲田三輝 古川恵子 前田靖子 松尾智恵子 松永庸子 丸山さ

| | |
|---------------|------------|
| 合計 | 1,039,687円 |
| 活動支援金のぞみ21カンパ | 743,187円 |
| 雪だるま3号カンパ | 47,000円 |
| 東日本支援カンパ | 23,000円 |
| | 226,500円 |

より 水本敬子 三野桂子 村田聡子 村西美由紀 室屋芳乃 森川キミエ 山下澄子 山中陽子 山本亮輔 吉田美抄子 吉野陽子 吉村啓 渡邊眞志子
 計107名(匿名含む)

(2011年8月1日～10月31日までに募金をして下さった方、ならびに「のぞみ21」雑貨・支援コーヒー・紅茶の購入を通じて活動を支援して下さいました方です。通信にお名前を紹介することを許可いただいた方のみ掲載しています。)

● コーヒー・紅茶キャンペーン ●

期間中、商品(コーヒー・紅茶、のぞみ21雑貨書籍等)を5,000円以上ご注文いただいた先着10名の方に、ペラルーシで仕入れたスープの素(粉末タイプ)をプレゼントします!

期間

12月1日(木)～12月15日(木)まで



ご注文は
お早めどうぞ

皆さまからのメッセージ(一部抜粋)

●福島に何か役立てていただければ幸いです。●原発がいらぬ社会を作りましょう。●半年ですね。25年ですね。今後よろしく願います。●原発事故で苦しんでおられる方々の、少しでの支援になればと思います。●世界の人々にもう一度原発について真剣に考えてもらいたいと思っています。●できることは本当にわずかですが、少しずつ続けていきたいと思っています。●日本の原発が一刻も早くとまりますように。●安全に早く暮らせますように。●被爆者治療の権威によってチエルノブイリの被害が過小に評価され、今、福島の人々が切り捨てられようとしていることが残念です。●福島支援を立ち上げてください。●我々全員の問題です。共に前に進みたいですね!! ●少しですがお役に立てればうれしいです。●福島は父の故郷です。日本中皆つながっています。●同じ原発事故が起きた国の国民として、何かせずにはいられません。●気をつけてお励みください。●ズーッと見守っています。●核のない世界へ向けて。●一日も早く、前を向いて歩いて行かれますように祈ります。●「脱原発」にむかってガンパロウ。●これからも地道な活動頑張ってください。●微力ながら応援させていただきます。●放射能はいりません。子どもたちを守りたい!! ●光輝いた未来がくるように自分に何ができるのか、私も常に考え、支援します! ●チエルノブイリ被害者の方が一歩でも前進できますように祈ります。●医療支援をしないですむ状態であってほしいです。●早期復興を願っています!! ●原発の恐さを実感しています。●忘れることなく応援していきたいです。●前回の記事、すごくよかったです。よく分かりました。

編集後記

今回は都合により「会員さん紹介コーナー」をお休みさせていただきました。ようやく「コメリの福祉工房」のぞみ21よりマトリョーシカやリネン雑貨が届きました。カタログチラシを同封していますのでぜひご覧ください。また次号でも引き続き、秋のペラルーシ訪問について特集する予定です。どうぞお楽しみに!(み)